

季刊 ひたすらなるつながり

創刊号

2019年1月

みんなで創っていく
地域福祉像を求めて

特集〈02-08〉

「ひたすらなるつながり、
「こ」からはじめよう」

宮川バネ工業(株) 宮川 絵理子さん

(社福)さわらび福祉会 金子 秀明さん

(社福)幸寿会 日比 晴久さん

おてんとさん 菅谷 寛子さん

滋賀県知事 二日月 大造さん

滋賀県社会福祉協議会会長 渡邊 光春

連載〈09-11〉縁共生の場探訪

認定特定非営利活動法人あさがお

コラム〈12〉県政レポート

季刊「ひたすらなるつながり」
創刊によせて

連載〈13-14〉生きつらさを生きる

児童養護施設や里親のもとで暮らす
子どもたちの社会への架け橋

連載〈15-16〉LOVEつながる滋賀の縁

(社福)甲南会 坪川 拓己さん

(株)メディカル甲賀 谷口 卓也さん

コラム〈17〉霞ヶ関レポート

2040年の地域共生、地域福祉

コラム〈22〉福祉論壇

共生社会ってなんだ？

社会活動家/法政大学教授 湯浅 誠さん

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 広報誌

季刊 ひたすらなるつながり

2019年1月1日発行

通巻1号

発行人 渡邊 光春

〒525-0072 草津市笠山七丁目 8-138

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

定価 500円(税込)

みんなで創っていく地域福祉像を求めて

ソニーを創業された井深大さんは、後半生は児童福祉の仕事をし、東京都の社会福祉協議会会長をされた方です。井深さんは障害のあるお嬢さんのことを「十字架」と言い、同時に「娘は光」と言われたそうです。井深さんの言葉は障害のある娘さんに「光」を見たのだとの見方があります。

福祉の仕事に関わるものとして、社会福祉法人として、その光を見分け、伝えていくことが、福祉の本質をとらえた福祉実践をしていくために重要なことではないかと感じています。

たとえば、「ライフ」という言葉のとらえ方ですが、私見ですが、医学では「命」ととらえ、命を少しでも延ばしていくのが医学の使命です。福祉は「生活」ととらえ、生活課題の解決を使命としていると考えています。私たちは、「滋賀の縁創造実践センター」の実践の中でさまざまな人の生きづらさという「ライフ」に直面しました。



近江学園レリーフとベンチに座る糸賀一雄

こうした問題に縁創造実践センターは①制度の狭間等への問題提起・課題解決型ネットワーク／②連携の基本システム／③共生社会をつくるための手法としての3つの機能を発揮し課題対応をしてきたと思います。言い換えれば福祉の可能性を追求し、生きづらさを抱えた人への新しい可能性を拓いていった福祉実践であります。しかしながらこの福祉実践はまだ途上にあります。こうした福祉実践を確かなものにし、さまざまな「ライフ」に光を見出していく不断の積み重ねをしていく上でのキーワードは近江学園レリーフ除幕式において糸賀一雄氏が言われた「人間が本当に人間を理解していくひたすらなるつながり」の世界ではないかと思えます。それは相対的に不利な立場にある人へのあたたかい眼差しのある地域社会であり、それぞれの可能性を尊重する地域社会だと思います。そうした地域社会の実現のため



滋賀県社会福祉協議会 会長 渡邊 光春

「ひたすらなるつながり」をコンセプトとし、滋賀の福祉で活動する喜び、また、滋賀の福祉で働く喜びと地域の明日の希望を伝える広報誌「ひたすらなるつながり」を創刊し、みんなで創っていく地域福祉像の形成につなげていきたいと思えます。興味深いコンテンツと読者を引き合わせるような、そして読者が書き手として参画できるような、そんな場として機能する広報誌をめざしたいと考えています。

本誌の今後の充実・発展にご協力いただけますようお願いしまして創刊の挨拶とさせていただきます。

社会保障や社会福祉はその国その地域のありようを映す鏡とされています。滋賀県社会福祉協議会は新しい時代に向けて滋賀という地域を映す鏡としての役割を担いたいという思いがあります。その思いを馳せ、平成という時代の最後の年に、私ども県社協は、「ひたすらなるつながり」というオピニオン誌を創刊します。

モデルなき少子高齢社会をすすむこの国の未来、私たちの地域の未来はどうなるのか。私たちは、だれもが「おめでとう」と誕生を祝福され、「ありがとう」と看取られる共生社会を実現していくのはさまざまな人との「ひたすらなるつながり」であると信じています。そして私たちだけでなく、そんな社会をつくっていききたいという仲間の志やビジョンを発信していくことが大切だと感じています。

昨夏、私たちは長寿社会福祉センターで子ども食堂フェスタという催しをしました。県内の子ども食堂に集う子どもたちと学生からシニア世代の食堂運営ボランティアの方たち、児童養護施設や

里親のもとで暮らす子どもたち、総勢600名もの笑顔、笑顔、笑顔。本当に「ひたすらなるつながり」への手ごたえを強く感じた大切なひとときでした。

人がどんな環境に生まれようと、どんな環境で高齢期を生きようと、そこに生きている人の尊厳を大事にする、そこに生まれた人を大事にする。そういう社会をつくっていかうとする人びとの営み。今日は、この5年間、ともに汗を流し切磋琢磨してきた縁の実践者の方々と、そして公私協働連携協定のもと、民間のチャレンジを支援してきてくださった三日月滋賀県知事とともに、平成という時代の滋賀の福祉の歩みを共有し、次の時代に向けて私たちがめざす「共生社会」について、それぞれの思いを発信していただきたいと思えます。

【写真】右から、谷口(滋賀県社会福祉協議会)、金子さん、日比さん、三日月さん、渡邊、宮川さん、菅谷さん、(滋賀県社会福祉協議会)、谷口・林の司会で6人の座談を行いました。



創刊記念

特集

ひたすらなるつながり、ここからはじめよう



金子 秀明さん

社会福祉法人さわらび福祉会
常務理事

さわらび福祉会が主体となり、ひきこもりがちな人やその家族を支援する「甲賀・湖南ひきこもり支援『奏-かなで-』」で、専門職や地域住民と協力し、さまざまな生きづらさを抱えた方へ寄り添う支援を継続して行っています。

ひたすらに誰かとつながりたくて 少しずつ社会との縁を紡ぎ直す 段階の人たちがいます

ひきこもりの方の支援をしています。継続して支援している32名のうち、障害や病気との診断をされていない方は半数以上の19名。「高校や大学を卒業（または中退）しました。働いた経験もあります」という方もいます。本人とまだまだ出会えない方、メモを置いたり、ドアの外から声をかけるだけの人もいます。

毛布を掛けることもありましたが、真っ暗にしてまわりの声が入ってこないように、自分の部屋が見られないように、ひたすらに社会とのつながりを切り続けてきたわけなんです。家族とも顔を合わせなかつたんですが、唯一夜中にコンビニへたばこを買いに行く。「俺、意地でもタスポをつくらなかつたんですよ。コンビニに行つて店員に言うのはタバコの番号だけ。俺、それだけですけれど、**社会との接点というか、小指だけぐら**いかもしれないけど何かつながりがほしかったんですよ」と、その頃の話をしてくれました。一方で、支援者が来れば、「今度来た

ら殺してやる」とか、そういう言葉しか出なかつた苦しい時間でした。いろんなことがあつて部屋から出始めた彼。週1日2時間のアルバイトを1年間続けることができました。少しだけ自信がついた彼は、「**普通とか一般とか定義はよく分らないですけど、やっぱり憧れがあるんすわ。今は景気がいいから、俺みたいなやつでもひよつとしたら普通の中に紛れ込んでいけるかもしれない。やっぱり働いてみたいんですよ**」。私が「働いているやんか。それで今は十分やん」と言つたら、「ちゃんと普通に働きたいんですよ」と。ところが、ハローワークに行くことになると、もう履歴書を書くだけでも不安がいつぱいで、「13年間を何て書けばいいんだらう」とか、担当者に「最終の職歴は？」「離職票はありますか？」とか聞かれると、顔つきが変わつてしまひました。それでも今、普通という壁にチャレンジして就職活動をしています。

ひきこもり状態で、家族も顔を見せてくれるだけでいい、そう願っていた毎日。まずは、顔を見せてくれてありがとう、と言われてたり、自分がいても否定されない場所を見つけることが必要。でも、1歩外に足を踏み出した方のかには、社会のなかでは障害者として生きていくか、普通にチャレンジしていくか、この2つしかないんだという思いをもっている方もいます。**あるがままの君でいいやないかと言われても、やっぱり納得できなくて、もがきながら生きています。**

私たちのこの活動は、契約を前提とした福祉サービスでやれない部分が多く、給付というかたちでもなかなか継続できない。でも、僕らは彼らの言葉に学びながら、これからのあるべき方向を探つていきたいと思っています。誰かが怖くてつながりを切つてきてしまつたけれども、ひたすらに誰かとつながりたくて少しずつ社会との縁を紡ぎ直す段階の人たちがいます。**普通とは何か、悩みながら、それでも自分らしく生きていけるということがすごく大事なのかなと思っています。**

ハローワークで仕事体験(※)に出会つたきつかけからお話しますと、私が所属している滋賀県中小企業家同友会の会合に、緑センターから企業登録のお願いに来られました。恥ずかしながら初めて「社会的養護(※)」という言葉を知り、そのとき職員さんがおっしゃつた「子どもたちの応援団を増やしたい」という言葉がずつと焼き付いて、今もその言葉に引つ張られている感じです。**社会的養護の子どもたちが社会に出るにあつてどんな困難を乗り越えているか、出てから実際にどんな困難に直面しているか、本当に衝撃を受けたことを覚えて**

います。一企業として、大人として。一番最初に仕事体験に来てくれたのは中学2年生の男の子でした。最後の日に駅まで送つていく道中に「もっと早く、ちゃんと1人で働けるようになりたいんです」と言つて帰つていったんですね。中学2年生の子からこういう言葉が出てくるなんて、社会的養護の子どもたちが抱えさせられているものの大きさに胸が締め

付けられました。この仕事体験は、**子どもたちにとって興味本位とか義務とかいうものではなくて将来に直結しているということ**に気づかされました。どの子ども自分の将来の自立というものを見つめて本当に一生懸命、一生懸命、仕事に取り組んでくれます。この事業を通して教えてもらった一番のことは、やっぱり子どもたちって本当に可能性のかたまりやなつて。誰も知らないところに1人でやつて来た朝の不安そうな顔が、帰る頃には早くも、ちょっと自信がある顔に。たった数日の体験で表情や言動が変わつていくんですよ。

登録している企業の数、関わる大人の数だけ、子どもの希望や安心につながつていっていると思つて、やっぱり現実には「福祉」というと一般企業としては専門知識もないですし、「うちにはできないことがない」つて、ちょっと構えてしまいます。**福祉的なアプローチからのつながり**、これは絶対必要です。それがなければ私もこの事業のことを知らなかつたので。



地域とともに歩む中小企業として、 関心はなくても関係がない企業は 1社たりともない

宮川 絵理子さん 宮川パネ工業株式会社 専務取締役

宮川パネ工業株式会社は、東近江市にある精密パネ・薄板パネ等を製造する会社。社会的養護のもとで暮らしている子どもたちの自立の力を育て「ハローワーク仕事体験」協力企業として就労体験を受け入れ、自立を応援しています。 ※「ハローワーク仕事体験」「社会的養護」については13ページ下段囲み参照

もそれに加えて、私たち企業や人同士の横のつながりのなかで、何となく「楽しそうなことやっているね」というような共感がひろがる、その「**共感からのつながり**」もすごく大事だと思つています。

この事業を通して私も従業員も社会の問題に関心が向くようになり、会社も社会の問題に関心をもち、いろんな機関とつながつていっているということが従業員の安心にもつながります。そういうつながりがこそが、最終的には誰もが安心して暮らせる地域に必要なことと思つています。地域とともに歩む中小企業として、関心はなくても関係がない企業は1社たりともないと思つています。うちみたいなごくごく普通の田舎の企業でもできることがある、**いろんなかたちの関わり方がある**ということを企業の立場から発信して、子どもたちの応援団を少しでも大きくしていきたいと思つています。今も、ネットワークを駆使して、子どもたちの希望している企業やお店を一生懸命探しています。

フリースペースの活動も3年と10か月が経ち、県内11か所まで広がりましたが、その後なかなか増えていません。やはりこの活動の難しさ、ハードルの高さがあるんです。

フリースペースの活動は、学校に行きにくくなっている子どもたちを、週に1度、デイサービス終了後に施設の送迎車で迎えに行きまして、一緒にご飯を食べて、一緒にお風呂に入って、遊んだり、勉強したりして過ごします。1人の子どもが1人の大人を独占できるように、施設職員や学生ボランティア、ご近所の方等、複数の大人がマンツーマンで関わります。

私たちの運営するフリースペースカーサが、県内で最初に始まって、回数で言うと160回以上実施をしています。今まで来た子どもは合計で4世帯11人、現在来ているのは2世帯3人です。

今回、「ひたすらなるつながり」という言葉を聞いて、私が最近感じていたことをお話しします。うちに来ている子どもたちの中で、一番大変だった家庭の子どもも



フリースペースは
いつまでもつながっていけるところ
にしていきたい

日比 晴久さん

社会福祉法人幸寿会 特別養護老人ホームカーサ月の輪 施設長

2015年3月より大津市の特別養護老人ホームカーサ月の輪で「フリースペースカーサ」を開設。さびしさやしんどさを抱えている子どもたちが安心して信頼できる大人とのびのび過ごせる夜の居場所を提供しています。

ちが通っていた時期が2年ほどありました。結局、児童養護施設に行くことになって、いったん関係は切れてしまったんです。ところが昨年の秋頃に突如、長女がカーサにやってきました。まあ、フリースペースの日だとわかっていたんですけど、それからは、だいたい月2回ぐらいはうちに来ているんですね。

本当にいつとき大変な状況で、家庭でもうまくいかない、学校にもなかなか行けていない中で、来るたびに、「もう、死にたい」とか「自分なんて要らない存在だ」とか言っていました。帰りに送って行くとき、踏切を渡って帰るんですけど、「どんな死に方やってたら楽かな」ということをよく言っていたんで、「絶対におまえは死ぬな」というメッセージを送るために、「20歳になったら飲みに行く」とひたすら伝えていたんです。

こうやってまた来てくれるようになって、今何の話をするかと言ったら、バイトのこととか、進学のこととか、2年前は死にたい言うてた子が結婚するとか言っ

てくれるんで、すごくうれしいんです。

なかなか施設の人たちには本音をしゃべれない、親ともなかなか会えないという状況なので、うちに来ているいろいろなことをしゃべってくれて、こうやってつながっていることがすごく大事だなというのを感じています。

「ひたすらなる」というのは、フリースペースに来てくれた時間、いつとき支援したらいいだけじゃなくて、いったん知り合えて関わった以上はずっと続けていかなきゃいけない。私はこの「ひたすらなるつながり」を勝手にそのように解釈して、フリースペースはいつまでもつながっていかるところにしていきたいな。というか、していかなきゃいけないと思っています。

本当に多くの子どもたちや家庭が、フリースペースのような場を必要としている状況にあると思いますので、受け皿を増やしていくために、もっとも一緒に活動できる仲間を増やしていきたいと考えています。

みんなでみんなを見守れる地域へ つながるように願って

というんですが、「ただいま」って来てくれる子に、「おかえり」って迎え続けることが大切なのかなと感じています。

「環境がつくれへんような親が悪い」とか「そんなん行政の仕事やのに、あんたら子ども抱えてやらんでいいで」という声もありました。私たちのことを思っているんですが、私たちは「やれる人がやればいいのか」と思います。県内の子ども食堂交流会で100を超えている子ども食堂の方々に出会い、その数のさらに何倍もの、携わっておられる方たちの気持ちに触れるだけで本当にすごいパワー

をいただいています。この思いのある人たちが途切れずに居場所をつくり続けるということ、私たち自身もこの居場所を続けていくために自分たちに何ができるかなと、常に考えています。

地元の民生委員さん、主任児童委員さんは気になるおうちに私たちのチラシを手配りしてくださるなど、大きな協力を続けてくださっています。縁センターの助成終了後も活動を継続するため、今、資金獲得にもチャレンジしています。が、何よりひとりでも多くの方に活動を知っていただけるようにとチラシを届けています。

八日市おかえり食堂は、子ども食堂なので子どもはもちろんですが、子どもから年配者までお互い顔見知りになれる出会いの場所になればいいなと思っています。地域には独居の年配者も多いので、みんなでみんなを見守れる地域へつながるように願っています。食堂に来る子どもはボランティアに来てくれる大学生や高校生から、下は赤ちゃんまで。わが子には敵しくなるけど、不思議とよその子には優しくできるんですよ。お互いさんで育て合っているような環境ができています。

スタッフの肩たたきを毎回「仕方ないな」と言いながら、スキンシップをとってくる子、憎まれ口をたたきながら、きつめのちよっかいを出してくる子、スタッフの気持ちを確認するような行動もありました。小学生だった子が今、中学生になってボランティアとして来てくれるようになっていきます。継続しているからこそ見える愛おしい子どもたちの姿です。子どもたちって、同じ火種でもボキッと折れる子もあれば燃えて

いても別にどうってことない子もいます。しんどさの度合いは、それぞれの心のなかの感じ方で、外から見えることではないんです。そつと近くに来る子が何か思っているのかなぐらいは感じますが、それで何かを解決できるわけではないので、「本当にどの子も、どうぞ紛れて来てね」という気持ちでいます。

さっきのお話にも出てきた共生社会、「認め/認められ」という観点では、私たちも初めは、子どもたちが自分の存在意義を感じられるような居場所にしよとすごく意気込んでいました。お手伝いとか積極的に声をかけていたのですが、だんだんわかってきたのは、ひとり親や共働きのおうちの子どもたちは、もう十分家のことをしている。そしてそういうおうちに限らず、今の子どもたちは何かと忙しい。おかえり食堂で条件つけて「偉いな」「賢いな」って伝えることもいいのかもしれないけど、無条件で受け入れて、「よく来てくれたね。待ってたで」と。私たちのところはおかえり食堂

菅谷 寛子さん

おてんとさん 代表

東近江市で、遊べる・学べる淡海子ども食堂「八日市おかえり食堂」を実施。「近所のおばちゃんのおせっかい」の気持ちで、ごはんを通じた地域ぐるみで子どもを見守り育ていく垣根のない居場所づくりに取り組んでいます。



次の時代に向けて
私たちがめざす“共生社会”



三日月 大造 さん
滋賀県知事 (2014年就任・2期目)

ありがとうございます。今、この場所で皆さんのお話を一緒にお聴きして、現場の臨場感がとても伝わってきました。まさしく私のこと、私たちの問題として活動しておられる。「生きづらさを抱える人の存在」をしっかりと認識し、さまざまな実践をしておられる。ご本人は大変厳しい状況にあり、周囲の人も「何とかならないだろうか」と思うような状況において、本人と支援者から発せられるメッセージは多くの人の心にしっかりと響いていると思いました。

私は「ひたすらなるつながり」と聞いて何と良い言葉だろうと思いましたが、この言葉から、**いつも・誰でも・いつまでも・どんな形でもつながることができ、そんな素晴らしいイメージをもちました。**私は当初から「えにし」の取り組みに共感し、期待して関わってきました。それをさらに「ひたすらなるつながり」として発展されることに感謝しており、知事である私なりにしっかりと関わり続けたいと思いました。

また、私は「健康しが」をみんなで作ろう」というメッセージを掲げて県内を歩いてきました。「なぜ急に『健康しが』と言いだしたのか」と聞かれたのですが、知事になって「みんなが新しい豊かさを創りませんか」と言い続けました。「今だけ、自分だけ、お金だけ、物だけじゃない豊かさをみんなで創りましょう」「すべての人が心で実感できる豊かさを、今だけじゃなく将来も実感できる豊かさをみんなで創りましょう」というアクションでした。

1人が100歩を歩むのではなく、
100人がそれぞれ1歩を歩めるような社会へ

4年間言い続けてきたのですが、「知事の言っていることがわかりにくい」「新しい豊かさと」という声が多く返ってきました。県民の皆さんに「どんなときに豊かだと感じますか」とアンケートをしたところ、「経済」や「つながり」もありましたが「健康」が最も多く約7割ありました。このことから「健康」に焦点を絞って県の施策を束ねてみようと考えました。

そこで、私が『健康しが』をみんなで作ろう」と言えば言うほど、「私はそれに入っていますか」というご質問を多くいただきました。たとえば、人手不足の中で必死に事業経営をされている中小企業の経営者の方、障害のある娘さんがおられる保護者の方、子どもを抱えて毎日の生活に追われている若いお母さん、山間部に住んでおり高齢の両親は介護が必要で、その上に夫の実家の介護もあるダブル介護をされている方などから「こんな私でも知事の『健康しが』に入っていますか」など、すごい反響があり、戸惑いや問いかけ

けも多くいただきました。

このメッセージの方向性は良いが、もっとみんなが参加できるようにする必要がありますと確信しました。これから私たちが進めることは、1人が100歩を歩むのではなく、100人がそれぞれ1歩を歩めるような社会であると思えます。自分1人で歩くだけではなく、**隣の人も一緒に歩いているだろうか、歩幅とか歩き方はどうか、ちょっと目配りや気配りができる、そんな滋賀を創っていき**たいと強く思っております。

その意味で「えにし」から発展して生まれたこの広報紙「ひたすらなるつながり」は、自分たちが頑張るだけではなく、他の人や他の地域はどんなことをされているかを知ることができ、それが励みになり、お互いが協力し合うきっかけになると思います。意見をだし合っつながら場は極めて重要です。私自身もそのつながりの中に入り、そのつながりを広げて県民みんなの幸せにつなげたいと思います。

「こうでなければならぬ」というかたちはない

「ひたすらなるつながり」はどんなかたちでも良いと思っております。そして、どんなかたちでも良いから、「ひたすらなるつながり」というのが人によって選択できるようなことが一番いいんではないかと思っております。

日比さんは、縁のフォーラムのなかで「私たちは高齢者福祉の分野だけでも、高齢者福祉だけをやるんじゃないよ。僕らは社会福祉をやるんだということをもっと意識していかなければならない」とおっしゃった。宮川さんは、「福祉のアプローチはもちろん大事だけれど、私たちは、福祉と言われるとちょっと構えてしまう」とおっしゃった。私がよく言いますのは、福祉の出来事を地域の出来事に変えた、変えようとしていただいています。そして日比さんや金子さんの活動の根底にもそれがあろうかと思っております。人の生きざま、この人の生きるをほ

渡邊 光春
社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会 会長
(2013年就任)



んと少しでも、1つでも支えられるつながりになりたいという思いです。

私たちはその共感力を高めなるといいたいです。「ひたすらなるつながり」はどんなかたちでも良い。こうでなければならぬというかたちはない。また、この場所でも勉強会をしたいと思います。ぜひ知事もゲストスピーカーで来てください。今日はみなさん、ありがとうございます。

県政レポート

滋賀県社会福祉協議会で民間福祉の現場力強化に深く携わってくださった県庁の幹部職員から、地域福祉や共生社会をテーマに、課題提起や政策レポートをいただきます。今回は創刊にあたってメッセージをいただきました。

滋賀県健康医療福祉部次長
市川 忠稔 (本誌編集委員)



季刊「ひたすらなるつながり」創刊によせて

私たちがとりまく社会は複雑化・多様化し、お互いの関係が薄れ、「生きづらさ」を抱えた人々が増えています。そんな中、一つひとつは小さな動きですが、滋賀の縁創造実践センターの取り組みなどから新たな支え合いの関係をつくろうという動きが、大きなうねりとなって県内に広がってきています。私は、この原点に「滋賀ならではのもの」があるのではないかと考えています。

このことは、第二次世界大戦後の荒廃した日本を少しずつでもよくしていくと、地道に取り組んでこられた、糸賀一雄氏をはじめとする滋賀の先人たちのことを改めて学んでいる中で強く感じました。

諸先輩は、数々の課題を前に、互いに手を携えて、言葉では言い尽くせない苦労を重ね、新たな福祉制度や県独自の取り組みを創り出してこられました。あらためて畏敬の念を抱くとともに、今日への「つながり」と親しみを実感するものとなっています。

そして、決して「古典的」なメッセージではなく、今を生きる私たちに、一人ひとりの「いのち」に向き合って課題に取り組んでいるか、心を揺さぶるように問いかけて、リアルに迫ってくるものを感じています。

県では、国連の持続可能な開発目標である「SDGs」の視点を政策に取り入れようと、また、国をあげて「地域共生社会」をつくろうと取り組んでいるところですが、先人たちの「誰ひとり取り残さない」という情熱と実践には、大いに学ぶべきところがあると思います。諸先輩が遺してくれた魂のこもった取り組みの積み重ねを、未来を見据えながら、守る

べきことは守り、育て、バトンをつないでいかなければならないとあらためて思っているところです。

そして、日々、地域や施設の中で、一人ひとりの「いのち」と「生きがい」を支える取り組みを地道に「実践」されている方々に、改めて敬意を表し、応援し続けることが、今、最も大切なことだと思っています。私は、地域で新しい「つながり」を創っている実践者にも、こうした地道な実践者にも、決して見えないけれど滋賀ならではの先人たちとしっかりつながった「糸」を感じており、これからもこの「糸」を大切にしながら、誰もが実感できるような取り組みが必要だと思っています。

「ひたすらなるつながり」。過去から現代、未来へ。「縁」を創造し「実践」する組織として新たなスタートに立つ滋賀県社会福祉協議会のもと創刊されるこのオピニオン誌を通じて、新たなつながりと実践が広がることを大いに期待しています。そして私も、福祉実践を重ねる皆さんや、一緒に頑張っている職場の仲間とともに、誰もがお互いの「いのち」を大切に、「生きがい」を感じられる社会づくりに尽力したいと思います。これからもよろしくお願いします。



戦後、滋賀県の福祉の礎を築いた先人たちの写真(写真中央)とともに近江学園の創設に関わり、その後も日本の障害福祉の発展に尽力した教育者の池田太郎(写真右)と芸術家の田村一二(写真左)

戦後、滋賀県の福祉の礎を築いた先人たちの

後見を行っています。ここでも、ご本人を保護すべき対象としてのみとらえるのではなく、ご本人の意思を大切にされた支援を行います。そのため、相談員(社会福祉士)や後見活動員(権利擁護・成年後見研修を修了した市民)が定期的にご本人にお会いし、お話しすることを大切にしています。

権利擁護支援についての「あさがお」からの課題提起

権利擁護支援で重要なことは、高齢者・障害者本人がその「思い(意思)」を自身で表明できること。それが難しい場合、本人が「思い(意思)」を表現できるように、そして、意思を決定し、行動に移せるようにサポートすることです。これからの時代、本人の意思決定支援にこだわり続ける権利擁護支援が必要であり、そのため次の

2点が急務です。

① 行政による権利擁護支援の仕組みの構築

権利擁護支援は、権利擁護を専門とするあさがおだけで実現できるものではありません。権利擁護支援のネットワークを含めた仕組みをきちんと構築し、機能させていくことが重要であり、行政の関わりは不可欠です。行政は制度面の責任をもち、その仕組みの中で支援者が専門性を活かして権利擁護支援を行えるようにすることが必要です。

② それぞれの支援者が行う意思決定支援

高齢者・障害者が抱える問題は、一人ひとり異なります。また、その問題は以前と比べ複雑かつ多岐にわたっており、一支援者で解決できることは限られています。高齢者・障害者に関わる支援者は各々の立場での役割をもちますが、権利擁護支援のネットワークを活かし、高齢者・障害者本人の問題解決に向けて目標を共有し、チームを組み、連携し、各々が本人の意思決定の支援者として活動していくことが必要です。

地域福祉の研究者からのVoice

権利擁護支援について



龍谷大学社会学部現代福祉学科 教授
筒井 のり子さん

「権利擁護」と聞くと、一般には「虐待などの権利侵害からの救済・保護」をイメージする人が多いのではないのでしょうか。しかし、権利擁護の内容はそれだけではなく、「すでにある権利を行使できるようにすること(権利行使の保障)」、さらには、その人らしい生活を実現するために「新たな“権利”を創造していくこと」も含めたより広い概念です。

では、この権利擁護支援は、どこで誰が行うのでしょうか。「権利擁護は専門家の役割」と思っている人も多いかもしれません。もちろん、社会福祉専門職や弁護士などの法律職の役割が大きいことはいうまでもありません。しかし、権利擁護支援の第一歩は、身近なところで「困りごとを抱えた人」「権利侵害を受けている人」に気づくことから始まります。

気づくためには、地域に人々が出会い交流する場があることがとても重要です。「変化」に気づけるのは、日頃から接している人だからです。

また、たとえ制度・サービスがあっても、そのことを知らない、あるいは利用の仕方がわからない人がたくさんいます。そもそも自分が「困っている」と認識できない人もいます。そんな人に、日常的な会話の中で、利用できる制度・サービスや相談窓口の情報を教えたり、必要な窓口につないだりする人が身近にいることの意味は本当に大きいのです。

権利擁護は専門職のみで完結するものではなく、基盤として見守り活動や居場所づくりなどの住民の地域福祉活動が重要な意味をもっています。住民一人ひとりの気づく力とつながり力が求められています。

生きづらさを生きる

児童養護施設や里親のもとで暮らす子どもたちの社会への架け橋

～ビーチック日夏店からのメッセージ～



「めっちゃかっこえーやん!男前になったなあ」

初めてプロの美容師さんに髪をセットしてもらってまわりからそう声をかけられた男の子は照れくさそうに、でもどこか得意げに鏡の自分に見入ります。プロの仕事、そして普段自分が出会うことのない「働く大人」のいきいきとした姿に、未来の自分を重ね合わせて。プロフェッショナルセミナーと名づけられたこのイベントは、児童養護施設や里親のもとで暮らす中高生の子もたちが10社以上の企業の働く大人と出会い、企業紹介プレゼンやブース交流を通して「働くこと」や「生きること」にふれる場です。2015年度から始まったこの取り組みは8回目を迎え、この日初参加となった美容室のヘアセット実演などを交えたパフォーマンスに、子どもたちの注目が集まりました。

「やればできる!仲間とならもっとできる!これから楽しんでね!」

体験の振り返りシートに小さな記入欄には収まりきらない、強くて熱いメッセージ。この言葉の送り主は、彦根市にある美容室ビーチック日夏店の美容師小西永子さんです。

プロフェッショナルセミナー登録企業としては希少な美容室として多くの子どもたちが体験に訪れ、さらに口コミでその評判はひろがり続けています。小西さんは仕事体験の受け入れ対応を担う1人として、言葉で、そして背中子どもたちに美容師の魅力を届けます。「人生楽しんだもん勝ち」を信条とする小西さんの明るく笑顔を引き出す接客は、コミュニケーションが苦手な子どもたちにとって大変刺激的で憧れです。体験後には子どもたちから「小西さんはずっと笑顔でお客様の話を丁寧に聞きながら髪形をきれいにし、すごいと思いました。働くことはお金を稼ぐだけじゃなくて、人との関わりや感謝の気持ちをもつことを大切にできる人生の中で最も輝いている時間だと思います」「努力すれば、お客様も自分もハッピーになれることを学びました」等の素直な感動の声が届けられ、小西さんにも笑顔がこぼれます。「来てくれる子どもたちはみんないい子で、吸収力の高さに驚くばかりです。カットした髪の毛を自主的に集めに行ってくれたり、ドリンクを聞いてくれたり…どれもとても勇気があることだと思うんですが、だからこそすごくうれしいですね」。

社長の村田将光さんは、子どもたちを取り巻く環境や仕事体験の取り組みを「企業にもいろいろな出番がある」と感じながら聞いていたと言います。「だからと言って、特別なことは何もしていません。美容室はもともとさまざまな方が訪れる場所であり、一緒に過ごすひとときを心地よいものにしていただくために心配りは当たり前。そんな日常のなかに子どもが来てくれることで、大人だけでは得られなかった気づきや驚きがあり、新鮮な風が入るんですよ」。将来に向けて、真剣なまなざしで訪れる子どもたち。そんな子どもたちを迎える体験日はスタッフが優し



社長
村田将光さん

おもいっきり最幸の夢を描き、
一緒に夢を叶える美容室
BE-CHICK Head Shop 日夏店

小西永子さん

くなっているように感じるのがうれしく誇らしいと、村田さんは頬を緩めます。「コミュニケーションが苦手な子が多いと聞いていますが、うちではお客さんから直接『ありがとう』の言葉をいただくこともあるので、そうしたひとつひとつを自信にして積み重ねてもらえたらいいなと思います。わくわく感をもちつつ、いろいろなお仕事について知り、その後の人生をより楽しいものにしていくお手伝いができたらうれしいです。僕たちは何があっても応援すると決めているので、この気持ち子どもたちに伝わるといいな」。

子どもたちがたくさんの「縁」をもてるように

「社会的養護」は一般的には耳慣れない言葉ですが、保護者がいない、または育てられない18歳未満の子どもを社会的に養育する仕組みです。子どもたちは、家庭に代わって施設や里親・ファミリーホームなどで育てられます。現在、滋賀県における社会的養護の子どもたちは約350人。県内の施設に入所している子どもの約7割が親からの虐待を受けているという現状のなかで、ここからだの課題を抱える子どもたちも多くいます。子どもたちはさまざまな夢を描き、原則18歳になると施設や里親のもとから巣立っていきます。高校在学中から自立生活のスタート(住居の確保、就職準備、進学費用等)のためにアルバイトをしてコツコツとお金を貯めている子どもたちもいます。皆、精一杯がんばろうとしています。しかし、親や親族などのサポートが得られにくいなかでひとり暮らしをする子どもも多く、退所後の生活を自分の力だけで築いていくことは大変難しいことです。就職はできても仕事をするうえでいろんな悩みが出てきたり、お金のやりくりで困ることもあります。

それでも、困ったときに自分で誰かに相談したり、まわりから声をかけて助けてもらえる関係があれば乗り越えていけることもたくさんあります。滋賀の縁創造実践センターの「児童養護施設や里親のもとで暮らす子どもたちの社会への架け橋づくり事業」は、子どもたちが退所する前にできるだけたくさんの「縁」をつくり、人を信じ、頼る力をつけることが、子どもたちの大きな糧になるとの思いから始まりました。そのなかのひとつの取り組みである「ハローわくわく仕事体験」は、施設入所中の中高生が長期休みを利用して自分の希望する仕事や会社を登録企業から選び、3～5日間の仕事体験をします。「ハローわくわく」は自立という人生の大きな分岐点に「不安」だけではなく少しでも「わくわく」という期待をもって飛び出していけるようにとの思いを込めた名称です。2017年、2018年と1名ずつ、この仕事体験で出会った企業に就職しました。苦労をしながらも社長さんや従業員さんたちのサポートでいきいきと暮らしている先輩に続くべく、今、高校生の子もたちも真剣にそして楽しく、自分の道を見つけようとハローわくわく仕事体験中です。

LOVE つながる 滋賀の縁

Listen 話を聴く
Open 風通しよく
Voice 声をあげる
Enjoy 楽しくやる



“何とかする”だけの仕事ではなく、
もっとクリエイティブに

たにくち たくや
谷口 卓也さん

株式会社メディカル甲賀 グループホーム「そまがわ」
介護支援専門員・社会福祉士

※2018年9月より看護小規模多機能型居宅介護「その音(ね)」に異動

毎日、地道にコツコツと。
ずっと現場にいたいと思っています

つぼかわ たくみ
坪川 拓己さん

社会福祉法人甲南会 グループホーム「せせらぎ」
管理者・介護福祉士・介護支援専門員



表情を引き締めます。
認知症のケアは、目の前の利用者だけでなく家族支援も重要視されます。人生をともししてきた家族の認知症は、その家族にとって大きな精神的負担になります。坪川さんは「スタッフには面会に来られた家族の方に積極的に話しかけるように伝えていきます。小さな話題から関係性をつくっていくのが家族支援の第一歩です」と管理者としての顔を見せます。

＝人も地域の社会資源
地域密着型サービスに分類されるGHは、地域との交流にとどまらず、認知症や高齢者に対する理解を広げていくことも社会的な使命のひとつ。谷口さんは「私たち一人ひとりが地域の社会資

源だと自覚する必要がある」と言います。

谷口さんは昨年、福祉の仕事をしている仲間たちとともに有志で、古民家を借りて高齢者が働くレストランのイベントを開催しました。そこでは、GHの利用者がウエイター役を務め、多少の失敗がありながらも、笑顔でお客様へのもてなしや気づかいを発揮される姿がありました。それはGHの日常の風景であり、堅苦しさを感ぜずに地域の方と認知症の方がふれあい、理解を深めることのできる活動として手応えを感じました。「家族や地域をちょっとずつ巻き込みながら、我が事・丸ごとの地域づくりの一翼を担っていると胸を張っていいんじゃないかな」と笑顔の谷口さん。

社会福祉法人甲南会
グループホームせせらぎ



甲賀市甲南町葛木869番地2
TEL:0748-86-0033
FAX:0748-86-0043
☒gh-seseragi@kohnankai.jp

株式会社メディカル甲賀
グループホームそまがわ



甲賀市甲南町野尻418番地
TEL:0748-70-0084
FAX:0748-70-2314
☒medicalkoka@outlook.jp

甲賀市内のグループホームで働く坪川さんと谷口さん。認知症高齢者に真摯に向き合ってケアを実践する2人にお話を伺いました。

＝ともに歩む介護の道

グループホーム(以下、GH)は認知症の高齢者が入居する施設として、高齢社会を迎えた今、全国的に増えつつあります。施設では入居者が能力に応じて料理や掃除といった役割を分担し、スタッフとともに自立した共同生活を送ります。甲賀市内のGHに勤務する坪川さんと谷口さんは、ともに社会福祉法人甲南会特別養護老人ホーム「せせらぎ苑」で、介護の道の第一歩を踏み出しました。「社会人はスーツを着てキリッと振る舞うもの、そんなイメージでしたが、学生の頃に休学してアルバイトとしてせせらぎ苑で働いて、社会に出たらこんな雰囲気です。働きたい、と思いましたが」と谷口さんが話すと、当時先輩だった坪川さんは「若いスタッフ同士で気が合って、楽しい雰囲気と勢いがあつたね」と振り返ります。人材確保や処遇改善が叫ばれる中、

＝現場の声を発信したい

GHの職員だからこそ社会に投げかけられる課題もあり、現場の試行錯誤を発信していきたいと2人は考えています。

「毎年のように滋賀県社会福祉学会(※)に応募していますよね」と話題をふる谷口さんに、坪川さんは「使命感のようなものです(笑)。現場から利用者の声を代弁することは大切なことです。また、以前は私自身が応募していましたが、最近ではスタッフにバトンをつなぎ、私は共同研究者として関わっています。学会という晴れの舞台で発表することで、ひたむきにケアに向き合っているスタッフの姿をぜひ見てもらいたいし、それが本人にとって大きな励みにもなります」と力を込めます。

2017年度の学会では、谷口さんの発表が注目を集めました。生活保護受給者はGHへの入居が極めて難しい状況にあるとの調査結果を示し、受給者であっても認知症GHが選択利用できる社会をめざすべきと提起。あわせて低所得者への対策の必要性を訴えました。地域包括支援センター

こうしたやりがいのもてる職場づくりや、業界のイメージ払拭も大事だと口をそろえます。

＝認知症ではなく人を見る

「恩師とも呼べる素晴らしい上司との出会いがあります」と話す坪川さん。「その方の『認知症ではなく人だよ』という言葉が、利用者と接する土台となっています」。認知症という「症状」を見るのではなく、「人」を見るという考え方で。「私もそう思います」とうなづく谷口さんは、「私たちは介護支援専門員として一人ひとりに応じたケアプランをつくるため利用者さんをアセスメントするのですが、医療系専門職と比べエビデンスに乏しいと感じることがあります。認知症の方の行動にはすべてに意味がありますので、『人』という視点、つまり生活や人生をひもとく役割を私たちが担うことで、よりよいケアにつなげることができそうです」と続けます。一方、「専門職の仮説の積み重ねによる『決め付け』は落とし穴だと、常に頭の片隅に置いておきたい」と谷口さんはその実践の難しさを語り、

＝福祉人として地域に根付く

「私たちにとって一番の評価は利用者や家族の声。悩みを抱えているスタッフにも自信をもって仕事をしてもらいたい」と話す坪川さん。一方で谷口さんは「たとえば、社会から逃げたくなったりしている若者に『福祉の業界で一緒に働こうよ』と声をかけられるような感覚を大事にしたい」と話します。GHの仕事は利用者の食事・排泄・入浴介助だけの日々ではなく、日常生活とともに営みながら一人ひとりの生活を見て、生活を見るために地域や社会を見て、そしてそこから変えていくような働きが求められます。それこそが福祉の仕事の魅力であると、2人の福祉人の言葉から感じました。認知症高齢者の入居するGH。特別な場所ではなく、街中に当たり前のようにある場所へーその垣根がなくなっていけば、もっとこの仕事にも注目が集まるだろうと、2人は前を向きます。

※年に1度、しがの福祉人が日頃の実践を通して得た発見や示唆を発表する学びの場。



おすすめの 映画と本



MOVIE チョコレートドーナツ

監督 トラヴィス・ファイン 主演 アラン・カミング

1979年カリフォルニア。ダウン症のマルコとゲイのカップルとの3人の生活は、本当の親子のような愛にあふれた日々でした。しかし、マルコは連れていかれ、2人はマルコを取り戻そうとするのですが…。

この映画は1970年代のアメリカ・ブルックリンでの実話を基に生まれました。偶然出会ったゲイのカップルに愛され、育てられるマルコ。彼は薬物依存症の母親と暮らしていましたが、いつも一人ぼっちでした。しかし、2人と出会い、初めて学校に通い、毎朝朝食をつくってもらい、笑顔があふれる幸せな日々を過ごします。

この作品では、「世間の常識、価値観」と「本人の望む暮らし」とのギャップをまざまざと見せられます。「誰もが幸せになりたい」と思う気持ちと、私たちはどのように向き合えばいいのか、考えさせられる作品です。

発売・販売元：ポニーキャニオン(C)2012 FALLEEFILM,LLC
価格：DVD ¥3,800(本体)+税、Blu-ray ¥4,700(本体)+税



BOOK

私たちがどう つながっているのか

著者 増田直紀
出版社 中央公論新社

イメージ先行であいまいに語られることが多かった「ネットワーク」について、「期待と不安をかき立てるこの単語を生活の糧に変える」ために、さまざまなネットワーク科学の理論を用いて解説をしています。

ネットワークの「主人公」は人と人との間の「枝」、つまり二者関係です。私たちは家族、職場等のさまざまなコミュニティに属し、その中での三者のつながり=三角形(クラスター)とその面的な広がり私たちに安心を提供し、ネットワークを形成させます。

一人ひとりが「枝」をもち、その枝を通じて誰かと結びつく。「私」は1人ではないが、同時にその枝をもつ唯一の存在であり、世界人類のなすネットワークの中でも唯一の位置をしめている」としています。筆者は「この事実をまず尊重してみよう」と主張します。

この本は「ひたすらつながり」について言語化し、その実現をめざす私たちの背中を押してくれる内容といえます。



BOOK

キッチン

著者 吉本ばなな
出版社 角川書店

祖母を亡くし天涯孤独の身となった主人公みかげは、田辺雄一とその母えり子(実は父親)の家に居候することになります。新たな生活で触れる何気ない優しさに、みかげは徐々に孤独と向き合いはじめますが…。

発表から30年の時を経て、今も読みつがれるベストセラー小説です。

「キッチン」という場所を大切に主人公みかげと変わりゆく周囲の人やものの様子が切なく美しい文章で綴られています。血のつながりはなくとも心を通わせるみかげと雄一・えり子の関係は「家族」そのものであり、多様なつながりや居場所があることを改めて考えるきっかけにあふれた1冊です。

大切な人の死、残された者の孤独、性別という概念にとらわれず生きたえり子。一見すると重苦しい要素を取り扱う作品ですが、孤独と向き合い、前を向くみかげの緻密な心理描写には多くの共感があり、胸にひっそりと輝きが芽吹くような読後感があります。

霞が関レポート

滋賀の福祉の創造実践に深く関わってくださった
厚生労働省の現役キャリアから、
国の政策の動きや重要な視点についてレポートしていただきます。

厚生労働省医薬・生活衛生局 総務課 課長補佐
鈴野 崇(本誌編集委員)



2040年の地域共生、地域福祉

去る2018年10月15日に、安倍総理が、現在の消費税率8%を2019年10月から10%に引き上げることを表明しました。消費税率の引上げにより国民の負担は増えていますが、その増える税収を活用して、低年金者への給付金の支給や幼児教育の無償化などが実施される予定です。これにより、社会保障の充実と消費税率の引上げをセットで行う「社会保障・税一体改革」は完了したと言えます。

では、一体改革のその先は?ということになりますが、厚生労働省では、10月19日に「2040年を展望した社会保障・働き方改革本部」を設置しました。一体改革は、団塊世代が75歳以上になる2025年を視野に置いて、社会保障の必要な改革が検討されましたが、今度は2040年です。

2040年までに社会がどのように変わるのか。2040年頃に65歳以上の高齢者人口はピークを迎えますが、より深刻なのは、15歳~65歳までの生産年齢人口の急減です。大雑把な数字ですが、今後20年間に、高齢者人口は約1割増える一方で、生産年齢人口は約2割も減ります。

こうした見通しを踏まえ、先ほどご紹介した社会保

障・働き方改革本部の下に4つのタスクフォース(TF:特定の課題に取り組むためのチーム)を設置し、必要な改革の検討がスタートしています。具体的には、①人口が減っても一人ひとりの人生の健康な期間を延ばす「健康寿命延伸TF」、②働き手が減っても効率的なサービス提供をめざす「医療・福祉サービス改革TF」、③若者が減っても元気な高齢者に一層活躍してもらうための「高齢者雇用TF」。そして、④人口が減っても多様な人々の社会参加により地域を支え合うための「地域共生TF」です。この地域共生TFでは、社会保障制度の縦割りを越えて、地域における包括的な支援体制の整備等について検討していきます。ただし、これらで改革の検討が十分なわけではありません。4つのTFは、いずれも人口の減少を所与として対策を検討するものですが、同時に、少子化対策の充実も必要です。そして、少子化対策は、行政による支援の充実に加え、結婚、妊娠、子供・子育てを社会全体で応援していくという社会的な気運を醸成し、個々人が結婚や子供についての希望を実現できる社会をめざすことが重要です。

ここまで述べてきて、縁センターの取り組みを振り返ると、子どもを真ん中に置いた地域づくりをめざす「遊べる・学べる淡海子ども食堂」は、まさに、これからの時代の地域共生の在り方を示す重要なモデルなのだ、改めて認識しました。

皆さんとともに、約20年後の2040年を見据えた地域共生、地域福祉について考えていけたらと思っています。よろしくお祈りします。



ながはま こども食堂にて

私たちは *ひたすらつながり* の理念に共感し、
仲間としてともにこの活動に取り組んでいます。

特別養護老人ホーム 近江舞子しょうぶ苑

子どもの居場所作り
「フリースペース アイリス」 3年目に入りました!



社会福祉法人 志賀福祉会
特別養護老人ホーム
近江舞子しょうぶ苑
〒520-0502
滋賀県大津市南小松90
☎077-596-2233
Homepage: shiga-f.com

・JR湖西線「近江舞子駅」より徒歩5分 → (便利)
・水泳場や琵琶湖パレイなど近くにあり → (楽しみ)

社会福祉法人ゆたか会
ともに

- ◆特別養護老人ホーム清風荘 ◆ケアハウスじゅらく
- ◆地域密着型小規模特別養護老人ホームさわの風
- ◆障害者支援施設清湖園 ◆湖西総合在宅サービスセンターほろん
- ◆朽木小規模特別養護老人ホーム/地域密着型小規模特別養護老人ホームやまゆりの里

◆本部 法人事務センター TEL 0740-22-3490
〒520-1605 滋賀県高島市今津町南新保 87-15 FAX 0740-22-6228

— 1ふだんの 暮らしの しあわせ —

私たちは人のつながりの中で、よりよい暮らしを共に
つくるウェルビーイング (well-being) としての福祉
をめざします。

通所介護
訪問介護
ケアプラン
ささえあいサポート



ささえあいサポートの家事支援▲

生活協同組合コープしが

相互扶助の精神
「ゆいの心」を理念に、
地域に貢献します。



社会福祉法人 慈恵会
ゆいの里

〒524-0103 滋賀県守山市洲本町1番地
TEL 077-585-4533 FAX 077-585-5675
http://www.yuinatosato.or.jp/



社会福祉法人たかしま会
地域に根ざした福祉ネットワーク!



- 養護老人ホーム 藤波園
- 小規模多機能型居宅介護事業所 陽だまり
- 障害者支援施設 藤美寮
- 就労継続支援B型 藤の樹工房
- デイサービスセンター アンフィニ

たかしま会では、近江聖人中江藤樹の遺徳を仰ぎ、
「誰でも努力すれば立派な人間になれる」という創
設の精神を尊び、事業運営を行っています。

〒520-1812 滋賀県高島市マキノ町西浜1415番地
TEL 0740-28-1138 FAX 0740-20-5554
http://takashimakai.or.jp/

一般社団法人滋賀県保育協議会

みんなでつなごう! みんなで紡ごう!
こどもの幸せ、地域の未来

2019年、私たちは
滋賀県保育協議会設立50周年・
保育士/保育教諭部会結成60周年
記念事業を実施します。



Year of celebration 2019年4月1日~2020年3月31日
Ceremony 2019年11月23日(祝/土)大津市民会館

社会福祉法人せんだん二葉会
せんだんはだんらん ~つながり、憩い、育ち合う家~



社会福祉法人 せんだん二葉会

私たちは、憩う場を提供し、
人とのつながりを築く窓口になります。

〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東2丁目2-5
TEL 077-573-2828 FAX 077-574-3311



社会福祉法人真盛園

「老いも若きも」みんなつながるまちづくり

1951年設立以来、滋賀県大津市坂本で介護サービスを
展開する社会福祉法人。特別養護老人ホームをはじめ
10事業開設。主な社会貢献活動-「地域交流センター」
「子ども食堂」「フリースペースしんせい」をオープン。

〒520-0113 滋賀県大津市坂本5丁目13番1号
TEL 077-578-0044 FAX 077-579-3839
http://www.sinseien.jp



社会福祉法人幸寿会

地域の中で共に「暮らし」を考える

“誰もが安心して暮らせる地域づくりのために、皆で意見を出し
合い、できることから実践する”ための「地域ケアを考えるセミ
ナー」、「学校に行きにくくなっている子どもやその親の居場所」
としての「フリースペースカーサ」、「誰もが立ち寄りお話しや相
談ができ、また健康を考えられる場所」として「しゃべり場まつ
もと」などの地域貢献活動を実践中。

〒520-2152 滋賀県大津市月輪1丁目12-8
TEL 077-545-0434 FAX 077-545-0540
http://koujyukai-otsu.com




社会福祉法人グロー

社会福祉法人グロー

生きることが光になる ほほえむちから

私たちは、生きることの尊さを表す「生きることが光に
なる」、誰でも持っている「ほほえむちから」、この二つ
の言葉を胸に、地域に生きる全ての人の、安心な暮らしが保障され、尊厳を持ってその人らしく生きることが
できる、そんな社会を創っていきます。
(滋賀県社会福祉事業団とオープンスペースレガート
がひとつになりました。)

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837番地2
TEL 0748-46-8188 FAX 0748-46-8288
http://www.glow.or.jp

滋賀県
児童福祉入所施設協議会

社会的養護にかかる
子ども達の輝く未来を願って
~子ども達に夢や希望を~

全て児童は、児童の権利に関する条約の精神にのっとり、
適切に養育されること、その生活を保障されること、愛され、
保護されること、その心身の健やかな成長及び発達
並びにその自立が図られることその他の福祉を等しく保
障される権利を有する。(児童福祉法第一条)

本会は、滋賀県における乳児院、児童養護施設、児童自
立支援施設、児童心理治療施設、母子生活支援施設、障
害児入所施設、自立援助ホームの各施設が緊密な連携
を図り、児童福祉の増進に寄与することを目的とし、併せ
て児童の健全育成の促進をめざす協議会です。



社会活動家／法政大学 教授
湯浅 誠さん

福祉 — ふくし ろんだん — 論壇

共生社会ってなんだ？

人はすべて凸凹で、ジグソーパズルのピースのように一人ひとり形が違う——このような多様性を示す表現は、基本的には肯定的に語られている。だからすばらしい、だからおもしろい、と。

しかしあえて言うと、私はシンプルな多様性礼賛は危ういと思っている。それがもつ困難を軽視したり不可視化してしまう側面があるからだ。

その困難とは、一言でいえば「つながりにくさ」である。同質的な正方形のピースばかりなら隙間なく並べるのは簡単だが、ジグソーパズルのピースは左右や天地を入れ替えるだけで、もうつながらない。だから共生社会とは、多様であることがもたらす「つながりにくさ」を味わい尽くした末に立ち現れる社会である。この「味わい尽くす」感じが、シンプルな多様性礼賛からは見えてこない。そこが危うい。

人は異質なものを怖れる。だから多様性は、安心と信頼よりも不安と不信により近く、より親しい。それが多様性のもたらす当然の帰結だ。この「当然」をひっくり返そうというのだから、共生社会とは、人の素直な心理に逆らう大胆で、無謀で、困難な試みだ。一言でいうと、めんどくさい。

たとえば「グローバル人材」とは、とても優れた一部の人しかできないものとされている。では誰がグローバル人材かと言えば、それは「たとえばアフリカの村で、現地の人々と何事かを成し遂げられる人」だ。英語をしゃべれる人ではない。異なる文化・生活習慣・伝統を踏まえて、他者とコミュニケーションの回路を開き、心合わせ・意識合わせ・力合わせができる人だ。これは別言すれば、共生社会の成立要件である。とても大変なことだ。

相手が外国人である必要はない。同じ日本人同士でも、健常者同士でも、性的志向が一緒でも、人は互いに異なる文化・生活習慣・伝統(家庭環境)をもって生きている。「こうすれば喜ぶはず。それがふつう」と思ったとたんに、それが何かの強要と受け取られることがある——それが「あたりまえ」で、「そんなふうには受け取らなくて、信じられない」などと絶対に言わないし、思わないのが、共生社会というものだ。果てしなくめんどくさい。

このめんどくささを1億2千万人に浸透させようというのだから、気の遠くなる話だ。できるわけないと思うのが、それこそ「ふつう」だ。それくらいのことを、私たちは唱えている。

先日、「ばっちゃん」の愛称で親しまれている広島の中本忠子さん(NPO法人「食べて語ろう会」理事長)の言葉が紹介されていた(2018年11月24日朝日新聞be)。

「『こんなにしたのに』という思いは全くない。うちの力が足りなかったと思うだけよ。今度はどういう方法でやればいいのかと考える。『ばっちゃんはこう思うけど、どうじゃろ』と聞く。嫌だと言われれば、また話し合っって違う方法を考える」。

これが共生社会の作法だと、私は思う。どんなときでも、私たちは「うちの力が足りなかっただけ」と思えるだろうか。「また話し合えばいい」と。

それがスタートラインだ(ゴールではない)。私たちはまだ共生社会のスタートラインに立っていない。共生社会というものを、そこから考えたい。それが、トランプ現象が席卷する世界の現状に対する妥当な受け止め方だと思うから。

私たちは *ひたすらひたすら* の理念に共感し、仲間としてともにこの活動に取り組んでいます。

日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償!!

平成30年度

ボランティア活動保険

全国200万人加入!!

保険金額

| 保険金の種類 | プラン | Aプラン | Bプラン |
|------------------|-----------------------------|--------------|--------------|
| | 死亡保険金 | | 1,040万円 |
| 後遺障害保険金 | | 1,040万円(限度額) | 1,400万円(限度額) |
| 入院保険金日額 | | 6,500円 | 10,000円 |
| 手術保険金 | 入院中の手術 | 65,000円 | 100,000円 |
| | 外来の手術 | 32,500円 | 50,000円 |
| 通院保険金日額 | | 4,000円 | 6,000円 |
| 特定感染症の補償 | 上記後遺障害、入院、通院の各補償金額(保険金額)に同じ | | |
| 葬祭費用保険金(特定感染症) | | 300万円(限度額) | |
| 賠償責任保険金(対人・対物共通) | | 5億円(限度額) | |

年間保険料(1名あたり)

| タイプ | プラン | Aプラン | Bプラン |
|----------|------------------|------|------|
| | 基本タイプ | | 350円 |
| 天災タイプ(※) | (基本タイプ+地震・噴火・津波) | 500円 | 710円 |

http://www.fukushihoken.co.jp

ふくしの保険 検索

(※)天災タイプでは、天災(地震、噴火または津波)に起因する被保険者自身のケガを補償しますが(天災危険担保特約条項)、賠償責任の補償については、天災に起因する場合は対象になりません。

保険金をお支払いする主な例



ボランティア行事用保険

(傷害保険、国内旅行傷害保険特約付傷害保険、賠償責任保険)

送迎サービス補償

(傷害保険)

福祉サービス総合補償

(傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険(オプション))

● このご案内は概要を説明したものです。お申込み、詳しい内容のお問い合わせは、あなたの地域の社会福祉協議会へ ●

団体契約者 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

〈引受幹事〉損害保険ジャパン日本興亜株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL:03(3349)5137
受付時間:平日の9:00~17:00(土日・祝日、12/31~1/3を除きます。)

取扱代理店 株式会社 福祉保険サービス

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL:03(3581)4667 FAX:03(3581)4763
営業時間:平日の9:30~17:30(12/29~1/3を除きます。)
この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。